教育雑誌『教育学術界』の〈文学〉と青年教員
――中内蝶二「寒梅」をめぐって――

出木良輔

はじめに

近代日本の教育雑誌というメディアを対象とする研究は、おおよそ平成二（一九九〇）年頃から精力的になされ始めている。明治期から昭和期にかけての教育雑誌の書誌情報や編集に携わった教育家、あるいは投書家として雑誌に関わった人々を網羅的に整理した木戸若雄の研究[1]はその基盤とも言えるものだが、平成五年に教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』（日本図書センター、平成五年八月）が刊行され、一〇〇誌以上に及ぶ戦前の教育雑誌の総目次が執筆者索引、所蔵機関一覧、解説などと共にまとめられたことも、言うまでもなくこの分野の研究に多大な進展をもたらしている。

この目次集成を紐解いてゆくと、日本における教育雑誌の創刊時期が明治三〇年代に集中していることに気づかされる。この時期に創刊された雑誌を実際に挙げるならば、『教育壇』（開発社、明治三〇年二月創刊）、『教育実験界』（育成会、明治三一年一月創刊）、『教育公論』（公論社、明治三二年一月創刊）、『日本之小学教師』（国民教育会、明治三二年四月創刊）、『教育学術界』（同文館、明治三二年一一月創刊）、『教育界』（金港堂、明治三四年一一月創刊）、『実験教授指針』（教授法研究会、明治三五年一月創刊）、『国民教育』（東洋社、明治三五年一月創刊）、『教育研究』（初等教育研究会、明治三七年四月創刊）、『小学校』（同文館、明治三九年四月創刊）など、枚挙にいとまがない。この理由は明らかではないが例えば小熊伸一は、第一に

明治二〇年代以降、義務教育の制度化に伴う就学率の上昇により、それまで以上に多くの子どもと接することとなった教員たちが「「教授者」としての力量形成の必要を感じはじめた」こと、第二に「日清戦争後の資本主義の進展にともない、企業化された大書肆」が「重要な販売ルートとして教科書とともに教育関係雑誌に目を向けはじめた」こと、そして第三に「教授実践への着目にともない、教師たちは、理論形成の場を求め、教育研究、児童研究を必要としだした」こととという、三つの要因を提示している[2]。

ここで特に注目したいのは、右に列挙した教育雑誌の多くが小説や詩歌などといった文学作品を掲載していたことである。これらの多くは読者である教育関係者の投稿によるものだが、その中でも特に小説は日本近代文学研究の領域においてすでに分析対象として取り上げられている。その先鞭となったのが和田敦彦であり、和田は右に挙げた雑誌の一つでもある『教育実験界』に投稿された「教育小説」を取り上げ、「理想の小学教員像を造形しようとする」これらの小説を読者論の観点から分析している[3]。

本稿で取り上げるのは、『教育実験界』と同じく明治三〇年代に創刊された教育雑誌の一つである『教育学術界』[4]である。『教育実験界』と『教育学術界』は、この時期の教育雑誌の「盾の両面」[5]を司っていたなどとも評されるが、後者の特徴は前者以上に多種多様な文学作品および文学に関連する言説を掲載していた点にある。

「精妙なる教育の学理を研究せむこと」「泰西の新研究を、成るべく早く、成るべく広く、抄訳し評論して、世に紹介せむこと」「我国に適切なる教育を研究せむこと」を趣意として刊行された『教育学術界』だが[6]、この雑誌は創刊時からすでに「教育的文学、伝記、発見等を載録す」[7]ることを目的とした「雑録」欄[8]を設けるなど「文学」の掲載に意識的でもあった。実際にこの雑誌は明治三三年には「主とする所文学にあらずと雖も、多少その趣味を帯びたるもの」[9]として文芸雑誌『新小説』において紹介されるなど、創刊後一年ほどですでに〈文学〉の世界からの注目も集めていたようだ。

また、そのような同誌の〈文学〉的傾向が読者にも好評を得ていたことは、例えば次の記述を見ても明らかだろう。以下に引用するのは、明治三五年九月号（五―六）の末尾に付された次巻予告の一部である[10]。

多数の読者中、殊に永年に渉れる読者中には、本誌について、一増拡張すべきことを勧告せらるゝ、読者多く、其言要するに、一巻の首尾理論を以て満たさるゝ傾きあれば、なほ教授管理の実際的方面を加へ、併せて文学美術に関するものを増加せよとの要求なり。本会も亦従来其感なきにあらざりしかば、今回多数読者の希望を納れ、なほ併せ

て各欄とも多少の変更改良をなさんとす。（中略）
文芸史伝　この欄を拡張して、趣味多きものたらしめんとす。

見ての通り、ここでは「多数読者の希望」を受けて次巻以降「各欄記事の上に聊か改良を加へんとす」ということが予告されているのだが、ここで実際に多くの読者の意見として挙げられているのが「教授管理の実際的方面」という教育実践的側面の強い記事に加え、「文学美術に関するもの」の充実を求めるものであることには注目して良い。ここから透けて見えるのは、読者として、あるいは書き手として〈文学〉を欲望する教員たちの姿に他ならないと言えよう。

本稿の目的は大きく分けて二つある。その第一は、創刊時から明治四〇年代にかけて『教育学術界』に掲載された文学作品および文学に関する諸言説を追跡することを通じて、この雑誌がいかなる〈文学〉を要求していたのかを探ることである。また、和田が「教員私小説」という形容を用いているように[11]、教育雑誌に掲載された小説の多くは同時代の教育現場を舞台とし、教員の生活を描く内容のものであり、そこにおいてはある一定の傾向を持つ〈理想〉の教員像が形象されてゆくことになる。そこで、同誌に掲載された初の創作小説である中内蝶二「寒梅」における教員表象を分析し、『教育学術界』が〈理想〉として提示する教員像の内実を明らかにすることが第二の目的である。

永嶺重敏は「教育雑誌は新教育思潮の地方への伝搬役であると同時に、地方教員間の意見交換の場としても機能していた」ことを指摘しているが[12]、『教育学術界』において読者の意見は誌面構成にまで反映されており、特に先に見た明治三五年の誌面改良予告以降は文学作品および文学関連記事の掲載が急激に増加している。その意味において先に述べた本稿での作業は、当時の教員たちの〈文学〉への欲望を浮き彫りにすると共に、教員たちの内面形成に〈文学〉が果たした役割を明らかにすることにも繋がるだろう。

一、『教育学術界』の中の〈文学〉

では、『教育学術界』に掲載された「文学美術に関する」記事とはいかなるものだったのかを具体的に見てみよう。この雑誌が創刊当初から「教育的文学」の掲載を企図した「雑録」欄を設けていたことは先に述べた通りだが、先述の「改良」予告がなされる明治三五年以前に目立つのは河井咀華（英三）らによるW・ハウフなどの翻訳小説、あるいは一般読者の投稿による詩歌の掲載である。その後第六巻以降（明治三五年一〇月～）は、中内蝶二、河井咀華、長谷川天渓といった文学者による創作や偉人伝、あるいはそれ以前にも見られた読者による詩歌の投稿が増加し始める。中内蝶二や河井咀華らは今日では顧みられることの少ない

作家たちではあるが、教育関係者を始めとした一般の読者だけでなくこのように職業作家たちによる作品をも掲載していた点に、同誌の〈文学〉的傾向を見出すことは難しくない。

『教育学術界』の文学関係記事として次に挙げられるのが、新刊小説の書評である。と言っても人気作家の新作が見境なく紹介されるなどというわけではなく、特に学校や教員の姿を描き出す小説が対象となっている。かさみね生（沼田笠峰）「教師の妻を読む」（八―六、明治三七年二月）は天野淡翠（寿太郎）と河井咀華による小説『教師之妻』（教進社、明治三七年一月）を、岡村紫峯「小説「棄石」を読む」（一五―六、明治四〇年九月）は小泉又一『教育小説 棄石』（同文館、明治四〇年五月）をそれぞれ評したものだが、他にも三浦圭三「吾輩は猫であるを読む」（一二―六、明治三九年三月）のように漱石の小説を取り上げた書評も見ることが出来る。

さらに注目すべきは、明治三七年頃には正宗白鳥と思しき人物[13]らによる同時代の文芸時評が集中的に掲載されてゆくことである。はくてう「文芸雑録」（八―七、明治三七年三月）「美術界の今日」（九―一、明治三七年四月）、白鳥生「新体詩朗読会と音楽会」（九―二、明治三七年五月）「片々録」（九―二、明治三七年五月～九―四、明治三七年七月）「時事雑感」（九―六、明治三七年九月～一〇―一、明治三七年一〇月）、楚化生「寸言砕語」（七―二、明治三六年四月）、四面楚歌生「紛々録」（一〇―四、明治三八年一月）などがその例として挙げられる。白鳥生は他にも「高等教育について」（九―三、明治三七年六月）と題した論考を寄せてもいるのだが、『教育学術界』における文学的な「趣味」の表れ方はこのように極めて多様だ。

こうした文学関連記事にとどまらず、この雑誌にはさらに「去年十六日芝の紅葉館に於て紅葉山人誕生日記念祭を執行せし」ことや「落合直文氏の辞世」を紹介する無記名「文人の噂」（八―五、明治三七年一月）、あるいは「泉鏡花氏は故尾崎紅葉氏の伝記を編纂せんとて目下材料蒐集中」であることなどを報じる無記名「人づて」（八―六、明治三七年二月）といった、文人ゴシップとでも言うべき記事までもが掲載されてゆく。

同時期に刊行されていた他の教育雑誌にも小説をはじめとした文学作品が掲載されていたことは先に何度も述べた通りだが、同時代の文芸時評、さらには文学者のゴシップ記事を数多く掲載している点は『教育学術界』独自の傾向であり、教育雑誌としてはきわめて異例の事態であったと言える。そしてこうした同誌の傾向が、先述したような「文学美術に関するものを増加せよ」という読者の希望によって生じたものであることには注目して良いだろう。

先に引用した『新小説』を始め、文芸色の強い総合雑誌の中にも『教育学術界』の名がしばしば見える[14]

ことを踏まえるならば、この雑誌は小熊伸一の言うように小学校教員および小熊伸一が指摘するような「教育学研究者や師範学校の学生、文検（文部省中等学校教員検定試験）受験者」[15]といった教育関係者だけでなく、同時代の文学青年たちをも読者として吸収していたのではないかということもまた推測される。しかしあくまで教育関係者を主たる読者として刊行される教育雑誌の一つである『教育学術界』に先に見たような文学関連記事が掲載されてゆくという事実は、教員あるいはその志望者たちの〈文学〉への欲望に応えようとする同誌の性格を示すものに他ならないと言えよう。

石戸谷哲夫は、明治二〇年代には「小説類が教育界においては禁制」とされ、教員や師範学校の学生が小説を読むことを厳しく咎められていたこと、そしてその後明治三〇年代になると「生きた教育」の実践を試みる青年教員たちが「新しい文芸の思潮をしきりに吸収」し始めていたことを明らかにしている[16]。そのような点から石戸谷は明治三〇年代を教育界における「ルネッサンス」期として位置づけているが、言うなれば明治三〇年代とは青年教員たちの〈文学〉への欲望が表面化し始めた時期だったのであり、『教育学術界』に数多く掲載された文学関連記事はそうした時代状況を端的に示していると言えよう。当時青年教員たちにとって重要な読書対象とされていた教育雑誌の一つである[17]『教育学術界』は、石戸谷の言う「ルネッサンス」を支え、あるいはその加速を促す装置として機能していたのである。

二、「教育小説」をめぐって

ただし当然ながら、同誌の文学関連記事の主流となるのはそうしたゴシップ記事などではなく、文学と教育を関連付けて論じたり、あるいは教育における文学の有効性／有害性を問うような教育論である。こうした議論が『教育学術界』を含めた教育界全体において本格化してゆくのが明治四〇年前後、特に明治四一年に起きた生田葵山の『都会』発禁事件以後であることは言うまでもないだろう[18]。しかし一方でこの雑誌においては明治三〇年代からすでに教育家・文学者の双方が文学と教育に関する記述を寄せていただけでなく[19]、一般青年および青年教員にとっての小説の読書に関する論説が掲載されてもいる。

特に後者は、当時〈文学〉の界隈において賑わっていた「教育小説」という独自の小説ジャンルをめぐる議論と深く関わっている。もちろんここでそうした議論の全てを網羅することは出来ないが、例えば平尾不孤が『早稲田学報』の「文芸教育」欄に寄せた記事[20]によって引き起こされたものもそのうちの一つだ。平尾はここで「少年の思想を豊富ならしむる」と共に

「文学を味はふの素地を養ふ」ために「家庭に於て読まれ得べきもの」として「教育小説」を位置づけ、教師はこれを積極的に生徒に読ませるべきだとしている。『帝国文学』記者の芥舟漁郎も平尾に概ね同調し、「教育小説」を導入すべき学校種は具体的には「尋常中学校高等女学校」であると述べ、同時に「尋常師範学校高等女子師範学校高等学校専門学校以上の学生、及小学校尋常中学校高等女学校以上の教員をして公然進むで小説を熟読せしむべきこと」をも求めている[21]。

一方で芥舟の意見に対し、市野虎渓は以下のように述べている[22]。

> 吾人は、適当なる小説といひ、君は教育小説といふ。吾人は、読ましむるの弊多くして益少なかるべきを思ひ、君は単に読むことを許すに止まらず、教科書として用ゆべしといふ。君の所謂教育小説とは如何なるものを指すか、教育小説が倫理の制約の下に立ちて、或る特殊の目的を以て作られたる覇絆芸術たることは勿論なるべし。（中略）吾人は一般の読物としての教育小説なるものすら多く見ざるに、君は教科書となすべき程のものを、如何にして何処より拉し来らんとするか。

市野は、教科書として用いられるだけの価値を持つ「教育小説」の存在に対して懐疑を向け、芥舟の論をあまりに早計なものとして批判しているのだが、同時に「教育小説とは如何なるものを指すか」という疑問が右の記述に内包されていることには注目して良いだろう。もとより小説のジャンルを厳密に定義すること自体に不可能性がつきまとうことは言うまでもなく、平尾不孤に端を発した「教育小説」をめぐる議論はこのように袋小路に陥ってゆくこととなる。ただしいずれにせよ平尾、芥舟、市野は「教育小説」を特に一〇代前半程度の青少年を対象にした「教育的」小説という程度の意味で捉えている点において共通していると言えるだろう。

以上のような一連の議論を踏まえた上で注目したいのは、この一連の議論とほぼ同時期に『教育学術界』（四―三、明治三五年一月）に掲載された一篇の「教育小説」である。この号には「新年附録」として、中内蝶二「寒梅」、ハウフ「家庭調話初嵐」、無記名「明治三四年教育小史」が収録されているのだが、目次の該当箇所には「寒梅」という小説タイトルは記されず、代わりに「教育小説」という言葉のみが記載されている（図1）。「寒梅」自体には「教育小説」という角書などは付されていないものの、目次の記述からはこの小説が「教育小説」という枠組みに合致するものとして掲載されたものであることが容易に推測されよう。

だとすれば、「寒梅」が有する「教育小説」としての側面、すなわちこの小説が有する「教育」性の内実をここで明らかにすることは、同誌において要求されていた「教育的な文学」の一つとしての「教育小説」

が担う機能、さらには同誌が〈理想〉として提示する教員像を把握することにも繋がるだろう。

新年附録
○教育小説……文學士 中内蝶二
○家庭訓話……爲國ハウフ
○明治三十四年 教育小史……本會編纂

図1　『教育学術界』（四一三、明治三五年一月）目次

三、「教育小説」としての中内蝶二「寒梅」

中内蝶二（明治八年五月～昭和一二年二月、本名義一）は、明治三三年に東京帝国大学を卒業後大町桂月の紹介で博文館に入社、明治三四年には『文芸倶楽部』編集主任となり、同誌の時文欄を担当する傍らで小説「難破船」（『太陽』明治三四年二月）などを発表している。その後明治三八年には『万朝報』に移り、劇評を担当しながら小説や劇作、さらには邦楽の作詞活動を行なった[23]。

また中内は『文芸倶楽部』編集主任時代に、「社会人生の不健全なる暗的方面」を材に取りつつも、それを作者の「理想を以て醇化」した「健全なる小説」を要求する評論「健全なる小説」（『文芸倶楽部』明治三四年七月）を発表しており、当時から一種の「教育的」な小説に対して意識的な作家だったと言える。

同じく『文芸倶楽部』時代に執筆された小説「寒梅」のプロットを大まかに記せば以下のようになる。物語の中心となるのは、病の母を養いながらミッション系の私立中学に勤務する青年教員松井三之助である。貧しい生活を送りながらも「学問」を研究し「真理」を探究することを常とする三之助だが、ダーウィンやスペンサーなどといった当時の新しい「学問」を積極的に生徒に紹介してゆく彼の教育方針は、キリスト教の教えを尊ぶ「学校の主義」に反するものとして、学校創始者のグリフスキーや学校監督の横川に見咎められることとなる。そうしてついに三之助は自身の教育を否定した上で全校の前で謝罪することを横川から求められるが、彼は逆に集会の場で自説に基づく演説を展開する。そのことにより三之助は教職を辞すことを余儀なくされ、自身を慕う数多くの生徒や母親、恋人に見送られながら上京してゆく。

三之助の形象においてまず注目すべきは、彼がきわめて貧しい生活を送る教員として描き出されている点である。先にも見た石戸谷哲夫の調査によれば、日清戦争以降の物価上昇は教員の生活を著しく悪化させており、全国の公立小学校教員の平均月俸は明治三五年時点で一二円程度だったという[24]。このことを踏まえれば三之助という教員の形象は、生活難に苦しむ当時

の青年教員のいわば典型として形象されていると言えよう。

こうしたことを確認した上で目を向けておきたいのは、この物語の冒頭に描かれた平山校長と横川の「密議」の場面である。

教会の鐘の音に、短き冬の日影は西に落ちて、放課後の寂しさは一しほまさる正教学校の校長室に、卓を囲みて密議を凝らす二人は、校長の平山松之進と、監督の横川鑑造とである。平山校長は、ちよつと振り返つて、薄暗うなりゆく窓外の景色を眺めながら、思ひ出したやうに珈琲の残りを一口啜つて、

「あの男は、まだ年齢は若いけれども、あれで、なか〳〵学問があつて、将来有望ですからな」と対者の顔色を窺つた。

横川監督は苦りきつた面持で「それは私も知らぬではない、よく存じて居る。併しゞやな、苟も此学校に奉職して、其月給でもつて飯を食つて居る以上は、此学校の主義を守つてもらはなければ困るではないか。」（中略）

「いくら惜しいと云つたつて、学校の為めにならない教師は役にたゝないからね」と横川監督は、やゝ不興の体。

三之助の「学問があ」る点を評価し彼を擁護しようとする平山校長だが、横川は「学問」以上に「学校の主義」を重視し、「学校の為めにならない教師は役にたゝない」と言い捨て、その後さらに「金さへ出せば、良い教師は幾らでも雇はれる」とも述べている。

大野淳一は「坊っちゃん」論の中で明治二〇～三〇年代頃の教員たちが置かれた状況について整理し、当時「中学校からすればすべての教師有資格者が等しく採用候補」であったと同時に「有資格者からすればすべての中学校が等しく就職可能な職場」[25]となっていたこと、そしてそれにより多くの教員がより良い待遇を求め各地の学校を転々とする「渡りもの」として生活していたことを明らかにしている。横川の一連の発言にこうした当時の状況が反映されていることは明らかだが、横川が言う「良い教師」が単に学識や教授能力に長けた教員を指すわけではないこともまた確かだろう。

つまり横川が求める「良い教師」とは、いわば一種の「従順な身体」（フーコー）[26]としての教員なのだ。大野が指摘するような社会状況は、雇用者（学校）―被雇用者（教員）間における資本主義的階級構造を強化するものでもあるだろう。そのような構造により支えられた教員社会において被雇用者として下位化された教員たちは、横川が言うように「学校の為めに」「役にた」つ一種の「従順な身体」として自らを律してゆくことを必然的に要求されるのである。

しかし三之助はそれを拒否し、「たとひ、校長が何

といはふが、又監督やグリフスキーが何んな顔をしやうが、われは、それに構はず、断然自説を立てとほすべきである。よし、よし、われは誓つて真理の為に戦はう」という思いを固めてゆく。その結果、三之助は先に触れたように全校の前での謝罪を強いられることとなるのだが、「学問」に基づく「自説」や「真理」を「学校の主義」以上に尊いものとする三之助に対し、この小説の語りは一貫して同情的であると言える。

あはれなる三之助よ、彼は幾度か辞職の決心をしたる身の遂に辞職すること能はざる不幸の境遇に陥つたのである。彼の一身を支配するものは只孝の一字、母の為には、如何なる辛苦にも堪へ、如何なる屈辱に甘ずるを厭はざりしかれは、一たび母の教訓に逢うて主義の為に戦はんと決心し、再び母の病気に会うて、主義を改むるの止むを得ざるに立ち至つた。（中略）意地悪き横川監督は、彼が弱点につけこんで、生徒の前に懺悔せよとの無理難題、それすら拒むに術なき三之助が今の境遇は、何たる無慙、何たる悲惨ぞ。

ここに見られるように三之助の内面や行動を一貫して美化し、あるいは三之助や横川に「あはれなる三之助」「意地悪き横川監督」などという作為的な性質付与を行なうこの小説の語りは、三之助に対する読者の感情移入を誘う操作的な語りだと言って良いだろう。こうした語りの操作から透けて見えるのは、三之助を読者にとって共感・同情すべき対象、言うなれば〈理想〉の教員像として提示する小説の力学に他ならない。『教育学術界』の発行趣意が「精妙なる教育の学理を研究せむこと」や「泰西の新研究」の紹介にあったことは先に見た通りだが、「学校の主義」以上に尊いものとして常に「学問」や「真理」を探究する三之助の態度は、言うなればこうした発行趣意に象徴されるような『教育学術界』という雑誌の方向性を体現するものでもあるだろう。

しかしこのように「主義」を貫いた結果三之助は辞職を余儀なくされ、上京を決意してゆくこととなる。職を失い、母と恋人を残して故郷からも去ってゆく三之助が生徒たちに「壮挙を祝」される様を描くのが以下の場面だが、これによって物語には一見向日的な結末がもたらされるようでもある。

折柄、門外にて「わつ」と揚ぐる鬨の声、三之助は、何事が起つたのであらうかと、窓の障子を明けてみれば、黒山の様に集まりたるは、正教学校の生徒三百人余り、何れも制服制帽で、「松井先生万歳」と記した大きな旗を押し立てゝ、三之助の壮挙を祝するのである。

三之助は感きはまりて、熱涙に咽んだ。

この場面で、金銭を得る手段であった教職を辞した三之助に与えられているのが、生徒の声援という金銭に還元不可能な報いであることには注目して良い。先

述したように高待遇の職場を求める多くの教員が「渡りもの」として各地を転々としていた明治三〇年代に発表された「寒梅」は、教員三之助が生徒からの賞賛を得ることを通じて「学問」を尊ぶ自らの「主義」を再確認してゆく物語でもあるのだ。

ただし先に述べた通り、この雑誌が提示する〈理想〉の教員像を体現する存在であるはずの三之助がグリフスキーや横川の思惑通り辞職してゆくという結末は、所謂典型的な勧善懲悪の枠組みからこの物語を逸脱させているとも言えよう。実際に中内は、先にも触れた評論「健全なる小説」の中で「今日の読者は、最早善人昌へ、悪人衰へ、才子佳人目出度合巹の式を挙ぐる底の大団円に向つて慰藉を得るものにあらず」と述べ、所謂勧善懲悪型の物語を前時代的なものとして捉えてもいる。こうしたことを踏まえるならば、中内自身の〈理想〉により「醇化」された一種の「健全なる小説」として「寒梅」を捉えることも十分に可能だろう。

しかし、それでもやはり三之助という教員の表象には、そうした中内の〈理想〉以上に『教育学術界』という雑誌のストラテジーが強固に関与していると言える。例えば「真理の為に戦」うことに無類の価値を見出す三之助の態度は、同誌が創刊のちょうど一年後に掲載した以下の論に提示されるような〈理想〉の教員像とも符合する[27]。

敬育の学理を研究するものと、実際の教授に従事するものとに論なく、何ぞ今の所謂教育家なるものに俗物多きや。悧巧で、如才なく、交際上手で、お世辞がよくて、（中略）而してうまく先進に取入つて、好地位を得て、悦に入つて翩々羽振りよく翺翔するもの、所謂今の気障気たつぷりなる当世教育家の見本ならずや。（中略）今の世は如才なき円き当りさはり無き卿等の力に須つこと少くして、骨頭あり、圭角あり、主義ありて、一往不屈の気象を有する教育家の手腕に須つ所多し。陋巷に貧処して泰然真理の考究に埋頭するもの、渾身人の子を思ふの熱情に駆られて育英に従事するもの、嗚呼世は此くの如きの人に須つこと多くして、而も何ぞ寥々とし其の人に乏しき、ひとり蚊群蝟集するものは俗物教育家あるのみ。

この論では見ての通り「好地位を得て、悦に入つて翩々羽振りよく翺翔する」「今の気障気たつぷりなる当世教育家」すなわち巧言令色な態度で地位を得ようとする教育者が「俗物教育家」と称され、嫌悪すべき対象として語られているわけだが、それと対置される形で理想視される「骨頭あり、圭角あり、主義ありて、一往不屈の気象を有する教育家」ないし「陋巷に貧処して泰然真理の考究に埋頭する」教員像が、まさしく三之助の態度と重なり合うものであることには注目して良い。このようなことを踏まえるならば三之助という教員像は、右の「俗物教育家」あるいは「発行趣意

書」といった『教育学術界』上の言説において提示されるありうべき〈理想〉の教員像を引き受ける形で描き出されていると言えるだろう。そしてその意味において『教育学術界』に掲載された「教育小説」あるいは「教育小説」としての「寒梅」とは、教員および教員志望者の内面を形成するための一つの言説装置、言うなれば物語化した教師教育言説として位置づけることが可能なのである。

おわりに

以上の分析を踏まえるならば教育雑誌における「教育小説」は、平尾不孤らに議論されていたような子どもや学生向けの教育的な読み物というよりも、あくまで教員たちのための読み物として掲載されたものだったことが推測されよう。もちろん教育雑誌に掲載された小説を教員が生徒、あるいは自身の子に教材として読ませるということが全く無かったと断定することは出来ないし、「寒梅」と同じく「新年附録」として掲載された「家庭訓話」初嵐」の冒頭には「我国に於いては、良き家庭に於いて、父母が其子女に談話する材料が甚だ乏し」く、「故に本会では、今後よき材料を集め、之を誌上に掲げて、この欠乏を補ふ考である」という附記がなされてもいる。実際にその後はハウフ「家庭訓話」幽霊船」（ＥＫ生翻案、四―四、明治三五年二月）や、『お伽倶楽部』幹事の天野雉彦による「教育夜話」子供と狼」（一八―四、明治四二年一月）といった小説、さらには江尻河一「雛鶯」（二五―六、大正元年九月）のような少女小説を思わせる小説もわずかながら掲載されてゆくほか、老兵衛「教育資料」兵士の生活」（一二―一、明治三八年一〇月～一二―二、明治三八年一一月・一二―四、明治三九年一月・一二―六、明治三九年三月・一三―四、明治三九年六月）のように日露戦期の軍隊生活を子ども向けに記した読み物も見られる。

ただしこれらはいずれも教員を表象することなく、子どもを視点人物とするテクストであるという点において「教員私小説」と呼ばれるような「教育小説」群とは区別される。物語内において形象される教員像のあり方に着目する限り、教育雑誌における小説群ないし「教育小説」とは、あくまで教員を中心的な読者として想定する「教育的文学」であり、先に述べた通り〈理想〉の教員像を表象の面から構築する言説装置だったのだと言える。そしてそのように、「教育論」と称されるような論説や評論に留まらず、小説や詩歌といった多様な言語表現を動員し〈理想〉の教員像を提示してゆく近代日本の教育雑誌が、同時代の教員の内面形成に果たした役割は決して小さくなかっただろう。

『教育学術界』が「教育小説」として「寒梅」を掲載した明治三五年以降、同誌においても「教育小説」

に関する記述がしばしば掲載されるようになるのだが、そのほとんどは当時の「教育小説」の物語内容に対して否定的な立場を示すものだ。例えば楚化生は、現今の「教育小説」の多くが「余りに狭隘なる範囲の中に、窮屈なる取材をなしつゝあるもの」であること、すなわち「唯、教員――学生――それ等の関係を描き、一の学校――一の教師――それ等を主題として、僅なる区域の内を描写し、以て教育の二字を冠するもの」であることを批判しているが[28]、読者からの投書を掲載する「投書籠」の欄にも「教育雑誌にあらはるゝ小説は」「元来小説を書く所謂青年文士が、教育界の内部が如何に神聖高潔なるかを知らずに」執筆したものに過ぎず、それらはもはや「教育者を馬鹿に」するようなものであるという意見が見られる[29]。このように、教育雑誌が掲載する小説が必ずしも全ての読者に好ましく受け入れられていたわけではなかったことにも注意が必要だろう。同誌に記者として関わった沼田笠峰もまた、笠みね生の名で以下のような記述を寄せている[30]。

◎女学生と男教師との浮華なる関係を描き、校長と部下の教員との陋劣なる軋轢を揣摩し、教員そのものを侮蔑する年少教師の罵言的小不平を漏らせるが如き、在来の教育小説は、我れ等があまりに多く読まされたる所にして、その取材の一律なると局面の狭隘なるとに失望したる所なりき。

教育小説とは、果して如上の限られたる範囲を固守せざるべからざるものか。

「教育小説」に対する笠峰の言及を「寒梅」に照射してみるならば、そこにおいて描かれていたのも横川と部下の三之助の「陋劣なる軋轢」であり、三之助が歪な教育現場を脱して上京してゆくという結末は「教員そのものを侮蔑する罵言的小不平」に過ぎないものとして捉えられなくもない。

しかしながら、大正二年に恒藤恭が鈴かけ次郎の名で同誌に投稿した「小説上京」（二七―六、大正二年九月～二八―三、大正二年一二月）のように、「小学教員なんかつまらない世の中の弱者だ日蔭者だ」と語り上京を決意する教員像、すなわち自身の「主義」を貫く手段として辞職を選択してゆく教員の姿をあえて肯定的に描き出す小説が大正期以降も同誌にしばしば掲載されてゆくこともまた事実だ。「教職がほとんどブラック企業化してい」る（佐藤学）[31]などと言われる現代の視点からこれらの小説を顧みることには少なからず意味もありそうだが、その点に関してここで詳しく踏み込むことはしないでおこう。

また他にも、「小悧巧な弁才と表情で都合よく自分を繕つて行く性質の女」すなわち先に見た「悧巧で、如才なく、交際上手」な「俗物教育家」を体現するような存在である女性教員Sを嫌悪の対象として否定的に語る藪重臣（福岡県立小倉工業学校教諭）「寄宿舎

の女」（二九―二、大正三年五月）のように、いわばアンチ「俗物教育家」という一種のコードが大正期以降もこの雑誌の掲載小説に継承されていることを示すものも確認できる。いずれにせよ確かなのは、「多数読者の希望」すなわち主要読者である教員たちの〈文学〉への欲望を受けて同誌に掲載された『教育学術界』の小説群が、雑誌側が求める〈理想〉の教員像を多分に反映するものでもあったということだろう。

本稿では、創刊当時から「教育的文学」を求め、文学の側からも注目を集めていた教育雑誌『教育学術界』が「多数読者の希望」を受けて明治三五年頃から〈文学〉的傾向を強めてゆく過程を追跡し、同年に「教育小説」として掲載された中内蝶二「寒梅」における教員表象の分析を試みた。そしてこのテクストにおいて〈理想〉の教員像として形象される三之助と『教育学術界』上の他の教育言説上で提示される〈理想〉の教員像との共通性を明らかにし、教員の内面形成を図ってゆく言説装置、いわば物語に変異した教育言説としての同誌の小説の機能面を指摘した。

このような小説の機能や、同誌において形象される〈理想〉の教員のあり方は、基本的には大正期の『教育学術界』の小説群にも引き継がれ、反復されてゆく。そうした意味で明治三五年に掲載された「教育小説」としての「寒梅」は、同誌の小説の機能およびそこに形象される〈理想〉の教員像のあり方を方向づけてもゆくテクストだったと言えよう。先に見たように、教員たちの〈文学〉への欲望を満たしつつも同誌が提示する〈理想〉の教員像を教員読者に内面化させてゆくことがこの雑誌の機能の一つであったとするならば、当時約三千～四千部の発行部数を誇ったという[32]『教育学術界』とそこに掲載された小説群が近代日本の教員たちの内面形成に、そして彼らが試みていたという「生きた教育」に与えた影響はそれほど小さくなかったはずである。

＊引用は全て初出に拠る。旧漢字は現行のものに改め、ルビは削除した。また、引用文中の傍点は全て私に付した。

---

1 木戸若雄『明治の教育ジャーナリズム』（大空社、平成二年三月）『大正時代の教育ジャーナリズム』（玉川大学出版部、昭和六〇年二月）『昭和の教育ジャーナリズム』（大空社、平成二年七月）

2 小熊伸一「明治後期における教育学術・実際雑誌の創刊とその役割」（『立教大学教育学科研究年報』平成二年一二月）

3 和田敦彦『読むということ―テクストと読書の理論から―』（ひつじ書房、平成九年一〇月）

4 この雑誌の書誌情報の詳細については、小熊伸一

「雑誌『教育学術界』解説」（寺崎昌男監修『教育学術界　解説』大空社、平成三年六月）など参照。

[5] 木戸若雄『明治の教育ジャーナリズム』（前掲）

[6] 無記名「発行趣意書」（一―一、明治三二年一一月）

[7] 注6に同じ。

[8] 明治三五年頃にはこの「雑録」欄から「文芸史伝」欄が独立し、明治三八年からはさらにそこから「文芸」欄が切り離される形で独立している。

[9] 宙外「己亥文壇の概観」（『新小説』明治三三年一月）

[10] 無記名「次巻より改良の予告」（五―六、明治三五年九月）

[11] 和田敦彦（前掲）

[12] 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部、平成九年七月）

[13] ここに挙げたものを含め、「はくてう」「白鳥生」の名で『教育学術界』に掲載された記事は現在刊行されている『正宗白鳥全集』には一切収録されていない。これらを直ちに正宗白鳥によるものと判断することには慎重であるべきだが、しかしながら正宗白鳥は同時期の明治三六年に「片々録」と題した同名の評論文を同じく「白鳥生」の署名で『読売新聞』に数回にわたり掲載しており、それらと『教育学術界』上の「片々録」との間に話題や主張内容の著しい乖離は認め難い。こうしたことを踏まえた上で、ここではこれらのテクストを正宗白鳥によるものであると推測した。

[14] 宙外「家庭教育の読物」（『新小説』明治三四年七月）、無記名「二月の諸雑誌」（『新小説』明治四二年三月）、無記名「四月号の各雑誌」（『新小説』明治四二年五月）。特に後藤宙外は「篤志の士は同誌に就きて、必ず一読あらんことを切望す」（「家庭教育の読物」）とまで述べている。『新小説』以外に掲載されたものとしては無記名「月次文壇」（『時代思潮』明治三八年九～一〇月）など。

[15] 小熊伸一「雑誌『教育学術界』解説」（前掲）

[16] 石戸谷哲夫『日本教員史研究』（野間教育研究所、昭和三三年一二月）

[17] 永嶺重敏（前掲）参照。また、小熊伸一「雑誌『教育学術界』解説」（前掲）はこの雑誌の読者層や発行部数についても言及している。

[18] 青年が小説を読むことの是非を問う論として『教育学術界』に掲載されたものには、無記名「文芸と教育との調和」（一六―五、明治四一年二月）や無記名「自然主義の小説」（一六―六、明治四一年三月）、門外郎「文壇垣のぞき」（一八―一、明治四一年一〇月）がある。またこれらと関連して、創刊一〇周年記念として組まれた「社会教育の研究」特集号（二〇―二、明治四二年一〇月）には、小松原英太郎「少年及青年の読み物に就て」と井上哲次郎「社会教育上より見たる芸術」に加え、幸田露伴「文芸と教育と」、島村抱

月「文芸と社会教育」が掲載されている。

[19]無記名「不健全なる読書界」（二―二、明治三三年一二月）、上田敏「文芸雑話」（一二―六、明治三九年四月～一三―一、明治三九年五月）など。

[20]無記名「教育小説を推奨す」（『早稲田学報』明治三五年一月）。市野虎渓（後掲）が「平尾不孤氏」によるものとしてこの記事に言及している。

[21]芥舟漁郎「教育界と小説」（『帝国文学』明治三五年三月）

[22]虎渓「帝国文学記者に質す」（『中央公論』明治三五年四月）

[23]昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書第四十二巻』（昭和女子大学近代文化研究所、昭和五〇年一一月）、日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典　第二巻』（講談社、昭和五二年一一月）参照。

[24]注16に同じ。

[25]大野淳一「「渡りもの」の教師たち―「坊っちゃん」ノート―」（『武蔵大学人文学会雑誌』昭和五七年三月）

[26]M・フーコー『監獄の誕生―監視と処罰』（田村俶訳、新潮社、昭和五二年九月）参照。

[27]無記名「俗物教育家」（二―一、明治三三年一一月）

[28]楚化生「寸言砕語」（七―二、明治三六年四月）

[29]涙月生「投書籠」（八―五、明治三七年一月）

[30]笠みね生「戦争・教育・小説」（九―五、明治三七年八月）

[31]大内裕和・斎藤貴男・佐藤学「「教育再生」の再生のために」（『現代思想』青土社、平成二六年三月）。『現代思想』の同号は「ブラック化する教育」と題した特集号。このように教育現場を所謂「ブラック企業」に重ねた上で教育問題を論じる言説は枚挙にいとまがなく、まとまったものとしては『週刊東洋経済』（東洋経済新報社、平成二六年九月一六日）の「学校が危ない」特集や、「教師の多忙」に焦点を当てた『総合教育技術』（小学館、平成二六年九月）の特集号などがある。

[32]注15に同じ。

（広島大学大学院文学研究科博士課程前期）